

## 【代表研究者】

田中 郷子

東京大学大学院 総合文化研究科

## 【研究題目】

建築におけるオリエンタリズムと公共圏

19 世紀後半ウィーンのイスラム様式のシナゴークを例に

## 【研究の目的】

本研究は 1849 年のユダヤ教徒自治体形成から、法的解放後のユダヤ人口の増加を経て、反ユダヤ主義が尖鋭化する世紀転換期にかけてのウィーン社会のダイナミズムを、急増するシナゴーク建築を題材に読み解こうとする。以下の 2 点が問題提起である。

1. 様式が施主の自己理解と捉えられた時代、ユダヤ教徒はなぜ同化の努力と矛盾する異国風の様式をシナゴークに用いたのか。イスラム様式の採用は内装に始まるが、その外装への拡大を、独自性を主張しつつ社会的承認を求める差異主義的な論理と見ることが可能か。

2. 大規模でエキゾチックなシナゴークが街の景観を変え、ユダヤ教徒の異質性が実体化したのではないか。ウィーンのユダヤ教徒は実に多様で、出身地や同化の程度により様々なグループに分裂し、対立もした。それ故シナゴークは急増した。その際頻繁に用いられたイスラム様式が、「異民族ユダヤ人」の一枚岩的なイメージ形成に貢献した可能性もある。

## 【研究の内容・方法】

1840 年代ドイツ語圏で始まり、20 世紀初頭まで欧米で支配的となったイスラム様式のシナゴーク成立の背景には、ユダヤ教徒の法的解放と当時の建築理論が関わっている。歴史主義の時代、様式にはそれを生んだ時代精神や文化的特徴が反映されていると考えられた。また特定の様式の採用は、それが反映する時代や文化の評価とみなされた。つまりイスラム様式をめぐる言説から、当時のオリエント観が見えてくるのである。本研究では、主にこの「様式連想」の議論を分析する方法をとる。特に、イスラム様式の導入をユダヤ人差別に帰する諸説では無視されてきた、ユダヤ教徒の見解に注目する。

ウィーン万博（1873）での建築群、武器庫、駅、工場、非カトリック教会などへのイスラム様式の影響を網羅することで、複雑なオリエント観と共に、シナゴークの特異性が浮き出た。

ユダヤ教徒は新しい社会的地位を建築で表そうとしたが、迫害の歴史の中でシナゴークは特定の様式発展史を持たなかった為、何らかの様式を借用せざるを得なく、どれでもよい、教会建築に類似したものがいいという見解もある中、民族の起源がオリエントであることを理由にしばしばイスラム様式が選ばれた。エルサレム神殿を模倣しようとする願望

もあった。反ユダヤ主義を意識して、顕著なオリエント様式を内装にとどめた例もあった。

また外観などは問題とならない親密な共同体の祈りの空間であったシナゴークが、法的解放と同化運動の中で華麗な外装を持つようになるだけではなく、巨大化する事実は、イスラム様式の採用という点と共に、ユダヤ教徒の公共圏への登場の際の差異主義的な論理という仮説を支える要点となる。

改革派ユダヤ教徒がシナゴークを「神殿 (Tempel)」と呼び、現居住地を新しいエルサレムと捉えようとする動きがあったことは注目し値する。これは想像上のオリエントの輸入が、建築様式にとどまらなかったことを示している。

#### 【結論・考察】

ユダヤ教徒が常に反ユダヤ主義の危険にさらされていたとはいえ、19世紀後半の法的解放は改善の一步をたどったわけで、後のショアーの歴史から遡って当時の状況を憶測することは許されない。ユダヤ教徒が公共圏に登場する際に、独自性を主張しつつ社会的承認を求めようとしたことは、当時の楽観的展望からは当然とも言える。

キリスト教徒の建築家と同じく、中世以来ヨーロッパに居住していたユダヤ教徒にとっても、シナゴークのイスラム様式は想像上のオリエントであった。一部のユダヤ教徒はこの様式で自らを「オリエンタル」な存在として表象したが、その豪華絢爛な建築が彼らの自負心を満たしたことは明らかである。キリスト教会と同等に、社会的に認知されたいという思いの表れである。シオンへの憧憬や文化的シオニズムとこの様式上のオリエンタリズムやシナゴークを「神殿」と呼びエルサレムを現地に再現しようとした動きとの関係解明は今後の課題である。